

更夜

『新壑』
45-1号

願望のおほかたはならずこもりゆく季に敷きつむる緋色の
絨氈

立ち向ふ意志なき朝吾がために焼く麴麴パン強く居間に匂へ
り

しんしんと更くる冬夜の識園に鋭きは死への憎生への憎

汚れつつ尚も生きつぐ執着をふり払ふかな疾風に立つ

ひと夏の陽焼けせる頬光らせて老母の吊す赤き唐辛子

冬の出立

『新壑』
45-2号

冬くれば何かを越えむ願望の微塵となるまで雪吹きつゝのる

いづくへの出立双の靴先のひかりつつ霜おおく日向を急ぐ

雪深く埋めきし骨片握りをらむ吾の獣のうつくしき飢え

なまぐさ

酸つよくだだよふ厨に薄刃もて開かむとするもの腥き

やりどなき夜の腕を垂らしたり奪はれむ像に影うつるかな

幻の橋

『新壑』
45-3号

かね

立ちおくれて歩む焦燥に打たれる靴の踵の金の迂り止め

雪原に一筋透る道ありてひとりの影の浮きつ沈みつ

冷えしるき冬の木椅子と対きてるる会話のごとく聞くは夜
嵐

雪乗せて冬の鞆静止せり出会ふものみな拒否の形に

軽ろき身に超えむとしたる橋ありて超えがたかりき幻の
橋

吾が焼く麵麩

『新壑』4号

おびただしき麵麩を焼きたり麵麩は匂ひて飢餓さへ美し
き記憶の朝ぞ

麵麩籠に麵麩充たしたり硝子戸をうちつけにおりおり午
の雪降る

雪積る園の鞆轡ゆれ動き風をあそびのはかなかりしも

積るだけ雪つもらせて丘に佇つ白樺の一樹みじろぎもなく

くれなるの魚さかしまに浮きゐたり夕闇迫るさえ泪いづる
に

冬の扉

『新壑』6
45-6号

ドア

歳重にも己れを用ざす冬の扉開かむ季を晚き雪降る

ま

死者との対話冬夜くり返しつづく時眼を底の涯雪舞ふかな

はづみ来るころろいづくに傾けむ光る猫の尾踏まむとしたる

煮ごぼるるものの匂ひのみなぎらふ厨ひそかに春の兆しき

めくりゆくどの頁も文字ひしめきぬ黄昏よりも冥らき昼

卯月

壺の半面にあはれうすら陽差し伸びて冬さながらに季定
まらず

なべてもの訝なしやすき春林に身ぬちへ戻さむあまた言葉
は

罪とがのひたぶるゆるする揺り椅子に閉ぢし臉のなかなか閑
かず

昼月はのどかに空に浮きゐたり塩ふる生魚のいよよ腥し
なまぐさ

きん
連翹の黄に明るむひとところ曇天の日の昏きところ癸たし
む

悲歌

『新壑』
45-8号

雨期故に言葉の嘘ぞみづみづし夜のしじまの悲歌ひとふし

みづうみは満面の水相逢はぬ杳き年月に来たるはつ夏

井の底の深き冥みゆ還り来よ死者に縫らしむ繩垂らした
り

はつ夏を咲くはおおかた白き花わが裡に患ふは白内障

ほのぼのと匂ひたちくるみどり野に命ひとつの重量に憩へり
かき

夏の森

『新壑』
45-9号

青路を水にひたせりみなづきの身のひとりに昏れしくりやべ

雨あとの森はみどりの闇に昏れまこと謔かなり母の琴唄

さびしさはま昼の森よ冥みつつ樹々ひっそりと騒ぐにあらず

子モシ一の明るき戦ぎかへりみて若からぬ身のいつまでひとり

とととと渡りしあとの橋の揺れ薄暮不穩に兆しはじめぬ

夏

『新壘』
45-10号

うつしみのよりどなき身や闇中にしづもる薔薇の鬱なる真
紅

たまらなくみどりが眩し草の原背かぬもののおごそかなり
き

ひとを宥すと吾に淋しき妥協なり老母の背越しに揺るる
雛罌粟

吾がめぐりつね寂しき音絶えず通はぬ風に風鈴の鳴る

怖れぬと不遜に立てばいつせいに風が覆へしゆく夏のあら草

晩夏

『新壘』
45-11号

瑕にきづ重ねきたりし身を悠くいくばくを支ふる晩夏光

とほ

貫かざる念ひ溢れむ夜の音の絶えて静かなる湯ぶねにあれ
ば

傷痕は薔薇のひかりに拠らしめむ人はしづかに勝者の微笑
み

ほほえ

ふか

一生の徒勞と嘆きは泓し禱りゐて次第に不在となるは
神々

譲らぬとつしみなき日やサルビアの花すさまじき色に散れ
るを

薔薇

『新壘』
45-12号

ひとつ灯にひとつの貌よせものを食むこの客観を孤独と呼ぶ
む

月明をひと伴なふごと歩みゐるて影顔つなき秋の孤独よ

向日葵の立ちたる限り夏と呼びほろびの愛の未だぬくしも

近づきていままた棘に傷つかむ薔薇は優位に迫りてやまず

生きの身に限りなく背負ふ瑕ならむ崩れてのちも棘決る
薔薇